

クイーンの身代金

竹村直久

登場人物

有茂里美	(24)	
東郷英雄	(35)	
三川矢吾作	(38)	
芳子	(36)	矢吾作の妻。
田中良二	(26)	
由利	(20)	良二の妹。

アパートの一室。大きなダンボール箱を運び込み、疲れてフウフウ息をしている三川矢吾作（38）と芳子（36）。

矢吾作「おっもてえなあ、もうやってらんないよこんなの」

芳子「何言ってるのよ、やっぱり私が来て良かったじゃないのよ、

ほんっとに一人じゃ何も出来ないんだから、ホラしっかり持って

！」

矢吾作「……ったくもう」

そこへ田中良二（26）が入って来る。

矢吾作「あ、君持って持って！」

慌てて手を貸す良二。

ダンボールを置く。

矢吾作「大変だったんだよ階段上げるの。何で二階なんかにしたの」

良二「そんなこと言っちゃって」

芳子「車の処分は出来たの？」

良二「大丈夫ですよ」

芳子「今んとこ順調だわねえ。後は東郷さんのトラックねえ」

ドアを開けてサッと東郷英雄（35）が入って来る。

しゃんとしてキビキビしている。

英雄「（良二に）おい、このアパートは大丈夫だろうな？」

良二「ここ友達の部屋なんですけど、実家に帰ってて一週間は戻って来ませんから。僕の近所なんですけど、人通りが少ないところが良いと思って」

英雄「人質は大丈夫か？　おい、運んだらすぐ開けてやれって言っただろう！」

矢吾作「今やろうと思ってたんだよ（芳子に）なあ」

芳子「はいはい」

英雄「少しは気を遣えよ、大事な金づるなんだからな」

ダンボールを開けて中から有茂里美（24）を起こす。

里美は縛られて猿ぐつわと目隠しをされている。

英雄「（矢吾作に）おい、覆面用意したか」

矢吾作「へいへい」

と袋からお面を出して三人にそれぞれ渡す。

矢吾作はガンダム。芳子はマチルダ（もしくはアニメヒロインのキャラ等）。

良二はゲゲゲの鬼太郎等。英雄はバカボンのパパ。

英雄「……おい」

矢吾作「はい」

英雄「他に無かったのかよ」

矢吾作「ゆっくり選んでる暇なくて。顔隠す為なんだから。どれだっつて良いでしょ」

英雄「……それならそれと（矢吾作の）取り替えろ」

矢吾作「嫌です」

英雄「何故だ」

矢吾作「だってコレは自分でしようと思ってたんですから」

英雄「選んでる暇なかったんだろ」

矢吾作「……そんな大人気ないこと言わないで下さいよ」

英雄「（睨む）……じゃいいよ」

とバカボンパパのお面を被る。

良二と芳子もそれぞれお面を被る。

里美の目隠しを取る英雄。

里美「（不安そうに辺りを見回す）」

英雄「(里美に) おい、コレを見る」

とスタンガンを出し、バリバリとスパークさせる。
驚愕して身を引く里美。

英雄「君を気絶させた時は三分の一の電圧だったんだ。分かるか、三分の一でも一瞬で気絶する程の威力だったんだからな、今これを身体につけてスパークさせれば、一瞬であの世行きだからな、もし大声を出したりしたらスパークさせる。分かったか」

里美ウンウンと頷く。

猿ぐつわを取る英雄。

ハアハアと肩で息をする里美。

英雄「じゃこれからの段取りを説明するからな。まず君の母親に電話をかける。そうしたら一言だけ喋らせてやるから、お母さん助

けて、と言うんだ。分かったか」

里美「私お母さんなんて言わないもん」

英雄「何？」

矢吾作がメモを見ながら携帯電話を掛けている。

里美「いつもママだから、ママって言わないと私だって信じてくれないかもしれないわよ」

英雄「何でもいい、それじゃママ助けてと言うんだ。分かったか」

里美「助けてなんてやあよダツさうい」

英雄「言う通りにしないとスパークだぞ(バリバリと火花を散らせる)」

里美「(怖れ) ……分かったわよ」

英雄「(矢吾作に) どうだ？」

矢吾作「ダメ。お店の方には出てないみたいで、家に掛けても留守電なってます(携帯を渡す)」

英雄「そうか」

里美「アッハハ」

英雄「笑うんじゃない！」

里美「ママは1週間や2週間家に帰って来ないことなんてザラだよ。もしかしたら日本にいないかもしれないよ。それに私がいなくなったって3日や4日は気にも止めないから」

英雄「何だと」

里美「私は居場所を知ってるから、連絡先を教えて上げても良くってよ」

英雄「じゃ番号を言え（スタンガンをかざす）」

里美「090、2345、134」

ダイヤルする英雄。

英雄「（携帯に）……アンタ有茂薫さんか、里美さんを拉致して預かってる。冗談なのかどうかは確認すれば分かることだ。身代金

は6000万円。今日中に今から言う口座に振り込め……なに？
どうしてだ。ダメだ。今日中でなければ里美さんを殺す」

里美「ちょっと、私に話させてよ」

携帯を里美の耳に寄せる英雄。

里美「……ママっ！ 何処なの？ ううん、それが今回はホントなの。ホントにホントだって！ 何処だか分からないとこに監禁されてるの。振り込まないと殺すって言ってるから、うん、うん、そう、分かった、何とか言ってみる（英雄に）ママは今彼氏とギリシヤにいるから、時差って分かる？ 日本ではお昼でもあつちはまだ朝の7時なの。向こうで銀行が開く時間には日本じゃもう銀行閉まってるでしょ、だから明日じゃないと日本の口座に振り込まれないのよ」

携帯を自分の耳に戻す英雄。

英雄「それじゃ明日銀行が開く時間に入金が確認出来なければ里美さんを殺す。口座番号を言うからメモしろ、平和銀行。ヨモギ支店。普通の0173536だ。分かったな（電話を切り里美に）」

おい、さっき今回はホントだって言ったのはどう言うことだ」

里美「前にね、ちよっとお金が欲しくて誘拐されたって嘘ついて身代金を貰ったことあるのよ。その時は8000万だったんだけど。今回もホントに誘拐されたって信じてないみたいだったけど大丈夫よ、お金はちゃんと振り込んでくれるから」

矢吾作「ええ、そんなら東郷さん。もつと金額上げましようよ。これじゃホントに誘拐してる甲斐が無いでしょ」

英雄「必要以上の欲張りな禁物だ。当初に決めた計画から少しでも逸脱することは避ける。それにこの女の言うことはあまり真に受けるな（里美に）君は頭の良い女だ。油断がならない」

里美「まあ明日になれば分かるわよ、警察にも知らせずにママは身代金を振り込んでくれるから、私はこんな貴重な体験させて貰っ

ただだからチャラで良いわ、信用しなさいよ、金持ちは嘘付かないんだから」

芳子「お嬢さん良い人だねえ、すいませんねえ、辛い思いをさせてしまつて。肩でもお揉みしますねえ（肩を揉む）」

矢吾作「おみ足の方は大丈夫ですか（足を揉む）」

良二「ねえ東郷さん。もし明日お金が振り込まれてなかったらどうするんですか？ 本当にこの人殺すんですか？」

英雄「当然だ」

里美「まさかそんなリスク犯さないでしょ。ここまでやったからにはどうでもお金を手にするまでは私に危害を加えたりしないわよ、そうでしょバカボン？」

英雄「……（矢吾作に）おい、やっぱりお面取り替えろ」

矢吾作「嫌ですよ（逃げる）」

英雄「待てコラ」

と追いかけてお面を取ろうとして揉み合う。

弾みで英雄のお面が取れてしまう。

英雄「あ」

里美「なんだ、結構イケメンじゃない、私タイプよ貴方みたいな人」

黙っていた英雄はサッと矢吾作のお面を取る。

矢吾作「ああっ」

英雄「俺だけ面が割れるのは不公平だからな」

矢吾作「なんですか貴方は、時々大人気ないんだから（里美に）ど

うも、始めまして私ハンドルネームでギレンと申します」

里美「どうも」

芳子「あたしも取って良いかしら、もう顔に汗かちちゃって気持ち

悪いったら（取る）」

英雄「まあ顔を見られただけで身元がバレる可能性は低いからな（

良二に）おい」

良二「（お面を取る）」

里美「あら〜貴方はなんだか僕ちゃんなのね、今日は皆さん宜しく

お願いしま〜す」

英雄「（里美に）おい。あんまり良い気になってると只ではすまな

いぞ」

里美「どうするのよ」

流しに置いてあった包丁を取り、里美の顔にかざす。

英雄「君の言うとおりそう簡単に殺したりしない、だが少し顔に模様でも付けてやろうか」

里美「（恐れ）ヒッ……」

矢吾作「まあまあ東郷さん。大丈夫ですよきっと、この人信用しても良いと思いますよ、明日になりゃきつとお金が振り込まれていきますよ」

英雄「ふん（包丁を元の場所に置く）」

里美「……私には貴方たち貧乏人の感覚は分からないけど、何でお金が必要なのよ」

矢吾作「わたしや八百屋をやってるんですけどね、近所に大手のスーパーが出来てから売り上げはめっきり下がっちゃうし、安い中国野菜は売れないし、国産の野菜は仕入れが高くてね、もうやって行けないんですよ」

芳子「嘘嘘、古い野菜でも平気で並べるからキャベツは萎びてるし、この人寝坊して市場へ仕入れにも行かないんですよ」

矢吾作「だって朝早いんだもん」

芳子「大体商売も出来ないのに八百屋なんか継ぐからこういうことになるのよ、もう銀行はおろか街金にも手を出しちゃって。まだ私たち30代なのに年金も抵当に入ってるんですよ。全くやり切れませんよこの人といった日にゃ。もうやめてお店も売っちゃおうって言ってるんですけどね、この人自分の家がなくなるのが嫌なんですよ」

矢吾作「だって、ぼくちゃんのお部屋がなくなっちゃうじゃないか」

芳子「この人子供の頃からずっと引きこもりで部屋に怪獣とかロボ

ットのお人形さんとかいっぱい並んでるんですよ」

矢吾作「お人形さんじゃない！ フィギアだって言ってるじゃないか」

芳子「はいはい、お人形じゃなくてヒギアね」

矢吾作「ヒギアじゃなくなってフィギアだよフィ・ギ・ア！」

英雄「お前たち、あまりそう言うことペラペラ喋ったんじゃ何の為に偽名で名乗ったり顔隠してたのか分からないだろう」

矢吾作「大丈夫ですよこれくらい話したって」

英雄「お前らは夫婦で八百屋をやってるけど営業不振。そして亭主はオタクだ。そこまでの情報がもし警察に伝わればお前たちに捜査が及ぶのはそう困難なことじゃないと思うが」

矢吾作「(ビビリ) そんな、全部嘘です。私が八百屋なものこの人と夫婦なもの、オタクなもの嘘です」

芳子「そうそう、里美さん。全部嘘ですから」

里美「アッハハハ大丈夫よ、後で警察に言おうなんてセコいことし

ないから。6000万くらいママにはなんでもないんだし。それで（良二に）僕ちゃんは何でお金が必要なの」

良二「……」

英雄「コイツは借金が500万あるのに派遣の仕事で年収100万にも満たない。その癖映画俳優になりたいとかって夢も諦めきれないんだ。それでコイツの捕まってる金融屋から俺に預けられて、今回の仕事にかませてやってるって訳だ（良二に）なっ」

良二「……」

英雄「（里美に）もしアンタを殺すことになったら実行するのはコイツだからな。コイツは俺が殺せって言えば自分の親だって殺さなきゃならないんだからな」

里美「怖い、でもその前にこの人才シッコちびって泣き出しちゃいそうだけど」

良二「……」

英雄「おい、しゃんとしろしゃんと！」

と良二の背中をドンと叩く。

叩かれてよろめく良二。

里美「下界ではみんな大変な思いしてるのねえ、勉強になったわ、

こんなことでもなきゃ一生知らなかったかもしれないものね。皆

さんに感謝しなくちゃ」

英雄「ふん。良い気なもんだな」

里美「あく私お腹空いた。ねえ何かないの？」

矢吾作「はあ、それじゃお弁当でも買って参りますので」

里美「コンビニなんかやめてよ、ここ何処なのかしらないけど、お弁当なら一流デパートの地下で買って来てよ」

矢吾作「はい分かりました」

里美「和食系のにしてね、お肉とかトンカツとか安っぽいのはやめて、デザートはコーヒージェリーにして、出来れば蜜里屋のが良いんだけど、無かったら他の一流のにしてよ」

矢吾作「（メモリ）はいはい、蜜里屋ですね、かしこまりました。」

それじゃマチルダ、行こうかね」
芳子「あいよ」

と二人立ち。ドアへ向かおうとした時ノック（ブザー）の音がする。
驚愕する一同。

英雄「何だ？（良二に）おい」

良二、英雄に首を横に振って見せ、そっと立ち上がり、
ドアへ向かう。
ノック（ブザー）の音、やや激しく続く。

良二「だ、誰ですか？」
由利の声「あんちゃん！ わたス、由利だ、さっき東京サ着いたば
っかりだ。はよ開けて」

驚愕の表情でドアを開けると飛び込んで来る由利（2
0）。

由利「あんちゃらん（抱き着く）」
良二「ゆ、由利！ なんで？」
由利「あんちゃんのアパートサ行ったら留守だったから諦めて帰ろ
うとしたんだけど、ここで見かけたんで付いて来たのサ。だ
けどどの部屋だか分かんなくて、そしたらここから声サしたから、
ああ良がったあ」

良二「……何で来たんだよ」
妹「私も女優になりてえからーあんちゃんだけずるいでねか」
良二「親父たちには言っただけ来たのか？」
妹「何でよ、あんちゃんだって夜中にこっそり家出して来たクセに、
私も同じにして来たサ」
良二「何だって、バカ……」

顔色が変わっている英雄。

由利「ここで何してたのサ？」

良二「こ、今度この部屋で映画の撮影があるんで、皆でリハーサルしてたんだ（皆に）ねっ」

矢吾作「あ、ああそうですよ」

由利「へえーすんげえ、何の映画だ？」

良二「ゆ、誘拐事件の映画でね、この人が誘拐された人なんだ（里美を指す）」

由利「ホントだあ、さすがに本格的だあ。あんちゃんは何の役だ？」

良二「お、俺は助けに来た刑事の役だ」

由利「ほえ〜カッけえなあ。さっすがあんちゃんだあ。他の人たちはあ？」

良二「この人たち（矢吾作と芳子）は娘を助けに来た御両親の役だ」

由利「へえ〜それで、監督さんは誰な？」

良二「か、監督は、この人（英雄を拝む）」

由利「（英雄に駆け寄り）始めますてえ。私良二の妹で、由利って言います。私も女優サなりたくて東京に来ました。宜しく願いますっ」

英雄「……」

由利「私、小さい頃からあんちゃんによく戦隊物ゴッコサしてて、憧れとったんです。見てあんちゃんホラ（と鞆からレーザー銃を出す）」

矢吾作「おおっ！ それは、超力戦隊オーレンジャーの標準装備、キングブラスターじゃないかっ！」

バツとレーザー銃を構えてポーズを取り、大見得を切る由利。

由利「地球侵略を企む、マシン帝国バラノイア！ 人類最大の危機を救えるのは、超文明のパワーを身に着けた彼等しかない……」

超力戦隊、オーレンジャー！」
矢吾作「おお〜（拍手）」

一同が啞然と見守る中、振り付きで歌い出す由利。

由利「♪ダッシュ！ ダッシュ！ オーレンジャー、ダッシュ！
ダッシュ！ オーレンジャー大地の鼓動が消えかかる、急げ〜ダ
ッシュ！ オーレンジャー♪」
矢吾作「凄い！ オーピンクだった！（一緒に歌い出す）♪熱い血流
れる鋼のマシーン。平和の願いを〜凍らせる〜……」

矢吾作の歌をBGMに一人芝居に走る由利。

由利「出たなバラノイアのマシン獣、超力変身オーピンク！ 私の
攻撃を受けてみなさいっ（光線銃を構え）キングブラスター！
スパーク！」

と銃を発射するポーズを取る。

矢吾作「素晴らしい！ 完璧だあ！」
良二「やめろっ！」

と由利から銃を取り、折って壊してしまう。

由利「何すんだあんちゃん！ 酷いでねか！（慌てて銃を拾う）」
矢吾作「何てことするんですか」
良二「もう子供の頃とは違うんだよ！」
由利「（泣く）うえ〜ん……」
矢吾作「アンタ、それ今ではプレミアが付いて数万円の値が付いて
る代物なんですよ」

里美「最低のお兄ちゃんね。こんな可愛い妹を泣かせて、大丈夫よ
由利ちゃん。私が新しいのを買ってあげるから、ねっ泣かないで」

由利「これは……あんちゃんとの思い出の詰った……」

良二「東京ってなあなあ、そんな甘いところじゃないんだよ、怖いところなんだよ」

里美「（吹出す）」

良二「（由利に）お前の来る様などろじゃないんだ。な、分かったらもう帰れ、お前まで親父やお袋に心配かけるな」

由利「ずるいよあんちゃんだけ、私だって女優サなりたいもん」

里美「私のママは芸能プロダクションの社長だから、由利ちゃんが見込みがあるなら売り込んで上げてても良いわよ」

良二「（里美に）ちよつと！」

由利「ホントだか！（元気になり）やったあゝラッキー。宜しく願いますスウ」

良二「由利っ」

由利「煩いなあんちゃんは黙っててえもう（里美に）本当ですねえ」

里美「ええ本当よ」

由利「（英雄に）すみません監督さん大事なりハーサルのとこ突然

お邪魔してえ、私ここで見学してても良いですかあ？」

里美「勿論よ、ねっ監督」

英雄「……」

里美「ねえ監督ってば」

由利「お願いしますスウ。私、勉強したいんですウ」

英雄「勝手にしろ！」

由利「……（泣きそうに顔を歪める）」

里美「何よそれ！ 大人気ないわねえ、こんな子にそんな言い方ないでしょう（由利に）大丈夫よ。本当は優しい人なんですけど、映画監督って皆ああなのよ」

由利「はい……」

里美「それじゃ監督、始めましょう」

英雄「何を？」

里美「私が捕まってる部屋へ刑事さんが両親を連れて駆け込んで来るシーンからにしましょう」

英雄「……」

里美「ホラお兄ちゃん、ちゃんとスタンバって、ちゃんとやらないとギョラ出ないわよギョラ」

良二「……」

矢吾作「（良二に）さあやりましようよ、もうこうなったら、ねえ」
芳子「そうよ、やりましよう」

と良二を促して入り口の側にスタンバる矢吾作と芳子。

由利「あつ、ちょっと待って。あんちゃん。トイレサどこだ？」

良二「（指す）」

由利「あたスズくと我慢しとって。あんちゃんとこ行ったらしよう
思うとってから、すんません。ちょっと待とって下さい」

と入ってドアを閉める。

台所の包丁を取って里美のロープを切り、解く英雄。

良二「何するんですか」

英雄「もう終わりだ。全部取り止めにして俺は消える。後は皆捜査
の手が伸びない様に祈ってる」

良二「東郷さん」

英雄「……」

良二「でも、やめちゃったら僕はどうなるんですか」

英雄「さあな、二丁目に行つて一生ホモ売春するか、それとも保険
掛けて事故死に見せかけて死ぬか……」

良二「そんなあ」

里美「（解かれた腕を擦る）ちょっと、待ちなさいよ、このまま由
利ちゃんには内緒にしといて計画続行しなさいよ。大丈夫よ、マ
マはちゃんと身代金振り込んでくれるんだから。ここで私のこと
解放しちゃったら、警察に貴方たちのこと言うわよ」

英雄「何っ」

里美「どうせ6000万なんてはした金何でもないんだから、ねえ、
もっと遊びましようよ」

矢吾作「そっこだよ東郷さん。やりましょって」

芳子「そうですよ、じゃなきゃこんな亭主の為にノコノコ付いて来た私もバカみたいじゃないですか」

里美「6000万は身代金じゃなくて、私が貴方たちに恵んで上げるってことで良いでしょ」

英雄「……」

良二「里美さん。言うとおりにしますので、約束してくれませんか、全部終わっても、由利には、誘拐のことは黙っててくれるって」

里美「いいわよ、あの子の前では良いお兄ちゃんでいたいもんねえ」
良二「……」

由利トイシから出てくる。

由利「お待たせしましたあ。そんじゃお願いしますう」

解かれたロープをまた縛られている用に身体にまとう

里美。

良二「か、監督、お願いしますっ!」

英雄「……」

良二「監督っ」

里美「どうしたの監督! そんなことじゃギヤラ出ないわよギヤラ、さあスタートかけてっ」

英雄「……よ、用意、スタート」

部屋の入り口から駆け込んで来る良二と矢吾作と芳江。

矢吾作「だ、大丈夫かっ! (里美に駆け寄る)」

里美「お、おじいちゃん」

矢吾作「まる子っ!」

里美「(止まり) 何よまる子って!」

矢吾作「いや、だっっておじいちゃんって言うから」

芳江「この人ちびまる子ちゃんが好きなんですよ」

里美「……それじゃ少しキャストを変えて行ってみますか、ね、今度は由利ちゃんもお芝居してみる？」

由利「はいやりますっ！」

里美「そうね、それじゃ今度はこの夫婦が誘拐されたことにしましょうか」

と立ち上がり、自分がまもっていたロープで矢吾作と

芳子を後ろ手に縛る。

縛られた二人は隅に座る。

里美「よしと、さ、由利ちゃんは誘拐された御両親を助けに来た娘の役ね」

由利「はいっ」

里美「お兄ちゃんは刑事で、監督、犯人役をやってくださる？」

英雄「何っ？」

里美「だって役者が足りないんだからしょうがないでしょ」

由利「お願いしますっ」

里美「ギャラギャラ」

英雄「……」

里美「じゃ、シナリオはこうね、誘拐された両親を助けに踏み込んで来た娘と刑事が犯人と対決するのよ。それじゃ皆スタンバって」

各々位置に着く。

里美「それじゃ行くわよ、よいい、スタートッ」

踏み込んで来る良二と由利。

良二「やっぱりここだったのか！（英雄に）警察だ、大人しくしろっ！」

由利「お父っあん、おっ母さん！」

矢吾作「おしんぐ！」

里美「はいそこで刑事は犯人に撃たれちゃう！」

英雄「（銃を構える格好をして）バキューン」

良二「やっ、やられたあ（倒れる）」

里美「そして撃たれた刑事も犯人に縛られてしまうのであった」

英雄は良二を後ろ手に縛る。

里美「本格的にね、しっかり縛って下さいよ。そして、実は変身戦隊だった由利ちゃんは変身して正義のヒロインに変わるのであつた」

由利「えっ？」

里美「さ、早く変身してっ、ナント力戦隊でしょう」

由利「は、はいっ」

変身のポーズを取る由利。

由利「超力変身っ！ オーオーピンクっ！」

英雄「（ちよつと乗り）正体を現したなオーピンクっ」

里美「変身したピンクには犯人がどんなに拳銃を撃っても跳ね返さ

れてしまうのであった」

英雄「バキューンバキューンバキューンバキューン……」

由利「カキンカキンカキンカキン」

里美「変身したピンクは得意の空手アクションで犯人をやっつける

のであった」

由利「アチャーツ！」

それらしく格闘する二人。

英雄「や、やられたあ（倒れる）」

里美「さあピンク、犯人を縛るのよ」

由利「オーレイッ！」

せつせと英雄を縛る由利。

里美「しっかりと縛ってね、そのところキチンとしないと芝居が嘘になりますからね」

由利「オーレイツ！」

とギユウギユウに縛る。

英雄を後手に縛って座らせたところで里美が梱包用のガムテープを拾い、4人の回りをグルグル回りながら動けない様に巻いていく。

里美「ねえねえ……」

4人「……」

里美「アンタたちってさあ、どんだけバカなの？」

矢吾作「へ？」

里美「アーツハハハ……貧乏人ってやっぱりバカなのね、って言うかバカだから貧乏なのかしら、それじゃシナリオ変更ーっ！

誘拐犯たちを一網打尽にした令嬢の活躍！ コレで行こうっ」

良二「え！」

里美「さ、由利ちゃん。警察に通報するわね、私はこの人たちに本当に誘拐されてたのよ」

良二「ちよっと！ 里美さんっ」

由利「（里美に）えっ？ ど、どういうことですかア」

里美「貴方のお兄ちゃんはね、俳優になりたくて東京に来たけど、才能なんか全然なくて、仕事は派遣のアルバイトで借金が溜まる一方だし、怖い金融屋さんからこの監督さんに身柄を引き渡されて、借金を返す為に私を誘拐したのよ」

由利「そ、そんな、本当なのかあんちゃん？」

良二「（里美に）約束が違うじゃないか！」

里美「何言ってるのよ犯罪者が！ さ、通報するわよ、あ、ちよっと待って、マスコミが一杯来るわねえ、私は誘拐犯を一網打尽に

したヒロインとしてワイドショーに引っ張りだこになるわ。テレビ写りが肝心だわ。ねえ由利ちゃん、何か持ってない？ お化粧直したいんだけど。ファンデーションとかリップとかある？」

由利「（後ずさり）……」

里美「……フフ、シヨックなの？ でもしょうがないでしょう本当のことなんだから。貴方のお兄ちゃんはね、お金の為に純粋な夢を捨てて悪の道に走った犯罪人なのよ」

良二「……」

里美「アーッハハハハハ……私家族の愛情とかって大っ嫌いだから。思いあつてる兄妹とか見るとうざりたいのよねー」

由利「そんな、酷いでねえか」

里美「アンタみたいに現実を甘く見たバカ娘が最初っから気に入らなかつたのよ。貴方のお兄ちゃんは最低野郎よ」

妹「違う！ あんちゃんはそんな人間じゃねえ、あんたは嘘付きだ

！（良二たちのガムテープを解こうとする）」

里美「やめなさいよ（由利を突き飛ばす）」

台所の包丁を取り、里美に突き付ける由利。

里美「なっ……ちよっと、やめなさいよ、危ないでしょ」

由利「あんちゃんは、そんな人間ではねえ……」

後ずさりする里美。包丁を突き付けて迫って行く由利。

里美「（狼狽し）ちよっと、落ち着きなさいって」

英雄「由利ちゃん。本当に悪いのはその女だ。構うことはない、こんな悪い女は殺しちゃった方が世の中の為だ！」

由利「……この人殺したら、あたしにも分け前サくれますか」

良二「由利！」

英雄「勿論だよ。死体は誰にも見つからない様に山の中に埋めてしまえば大丈夫だ。身代金を受け取ったら皆で山分けして、そしてらお兄ちゃんの借金も返して、幸せに暮らして行けるんだよ」

良二「やめろ、そんなことしちやダメだ」

英雄「黙れ！ お前はそんなこと言える立場じゃないだろう」

ひしひしと包丁を手に里美に迫って行く由利。

良二「ダメだ由利」

矢吾作「アンタ、この期に及んで何言い出すんですか、こっちは身代金貰って店立て直さなきゃならないんですから。そんなこと言わないで下さいよ」

芳子「それ！ 由利ちゃん。やっちゃえ！ ブツ刺せ！ 良い子だからその女をやっつけるんだよ」

英雄「由利ちゃんの分け前は千五百万円だ。綺麗なマンションに住んで、車だって買えるし。ドラマの主人公みたいな都会ライフが待ってるんだぞ」

由利「本当か？ ドラマみたいなか？」

英雄「ああそうだ」

良二「やめろ、由利、人殺しなんかしちやいけない。お兄ちゃんたちは正義の味方だっただろう。オーレンジャーは人殺しなんてしないだろう」

英雄「（良二に）お前今更やめられるとも思ってるのか。お前は世の中に戦いを挑んだんだ。今さら正義だなんて言い出すんなら何でこんなこと始めた。お前だって生きるか死ぬかだったんだろうが！ 生きてく為には社会の法律を守るか、破って生きて行くかの瀬戸際で、戦う方を選んだんだろうが！ 今更犯罪はいけないななんて腑抜けたことを言い出すんじゃない！」

由利「私、この人殺してやるサ！」

良二「やめろ由利」

由利「……わたしこの人やっつけて、あんちゃんも助けてあげるサ」
里美「た、助けて……」

包丁を振り上げる由利。

里美「きやあ〜〜っ」

良二「(歌う)♪ダッシュ！ ダッシュ！ オーレンジャー、ダッシュ！ ダッシュ！ オーレンジャー大地の鼓動が消えかかる、急げ〜ダッシュ！ オーレンジャー……」

必死の形相で歌う良二。

由利「……あんちゃん」

歌い続ける良二。

由利、ナイフを握ったままブルブル震え始める。

由利「あんちゃん……あんちゃん……あんちゃん……」

眩く様に口ずさみ始める由利。

由利「……熱い血流れる鋼のマシーン……平和の願いを〜凍らせる……」

歌い続ける良二。

手からナイフを落とす由利。

矢吾作「あ……」

英雄「くそ……」

里美「(へたり込む)」

泣きながら良二に合わせて歌う由利。

由利と良二「♪……明日に向かって勇気を燃やせば、バラノイアなんて恐くない……」

泣き顔が段々笑顔になり、懐かしそうに良二を見る。

微笑んで頷く良二。
振りもつけて踊り出す由利。

由利と良二「♪……走り出したら、止まらないぜ、オーレイ！ 喰らい着いたら、放さないぜ、オーレイ！ でーっかい夢を〜追いかけるのさ〜オーレイオーレイオーレイ、オーレンジャーー！」
由利「キングブラスター！ オーレイッ！」

そこで構えるはずの銃は先に良二に壊されてしまっている。

英雄「ピンクっ！ 新型のブラスターは私のポケットの中だ！」
由利「オーレイッ！」

英雄のポケットからスタンガンを取る。

矢吾作「その女の正体は憎きバラノイアなのだ、やっつけるんだ。ピンクっ！」
由利「オーレイッ！」
良二「おいバカ由利っ……！」
芳子「頑張って、負けるなピンクー！」
由利「行くわよバラノイアのマシン獣！」
里美「えっ」
由利「必殺！ キングブラスタースパーーーーク！（と里美に向ける）」

閃光と同時に暗転。

里美の声「ギャアー！！！」
矢吾作の声「やったあ〜」
芳子の声「やっちまえ〜」
英雄の声「良くやったぞピンク！」

良二の声「由利バカ」
里美の声「うえ〜痺れるう〜」
矢吾作の声「ばんざーい」

おわり

※本文400字詰め換算約42枚。